

夏の彷徨海カルデアベース。

夏といえば、いろいろな思い出がある夏である。無人島に漂着したり、神獣錬成に付き合わされたり、フェスに参加したと思ったら外宇宙と接続してしまったり、剣豪勝負が始まったり、マスターが分裂()したり、珍しく平穩に宝探しをしたり、何故か北極圏に進出したり、オゾンホールどころではない大気の孔が発生しかけたり_____、まあとにかくいろいろな事件の多い季節である。さて、そんな夏のある日。人類最後のマスター藤丸立香及びそのファーストサーヴァントのマシュ・キリエライトには管制室への集合命令がかかっていた。

「スピーディな集合、ありがとうございます！……さて、集合理由は歴戦のマスターなら、もうわかりですね？」

「毎年お馴染み、真夏の微小特異点ですか？」

「流石歴戦のマスター！お察しの通りです。」

100点満点の藤丸の回答にメガネをくいと上げたのはカルデアの協力者、アトラス院の叡智、シオン・エルトナム・ソカリスである。

「では、早速説明に入りましょう。今回の特異点はここ、場所的にはアメリカ・カリフォルニア州南部です。」

「フム、カリフォルニアか！懐かしい。カリフォルニアからスタートのロードレースに参加したことがあってな、機会があればもう一度参加したいものだ。」

「おや？では着いて行けますか？」

「断固として拒否する！」

「ですよね！」

カリフォルニアでの思い出を語りつつ全力でノーを表明したカルデア新所長、ゴルドルフ・ムジークをよそに、藤丸が思い出したように口を開いた。

「……あれ、あのテレビとかでよく見るハリウッドの看板って、カリフォルニアにあるんだっけ？」

「そうですね！カリフォルニアはハリウッドのお膝元ですから。他にも、今回のレイシフト先の南部海岸線はサンタ・バーバラという素晴らしいリゾート地で有名なですよ、先輩。」

「へー！特に何が有名とか、知ってたりする？」

「スペイン風の街並みと風光明媚な自然風景だと、いつかライブラリのパンフレットで見た記憶があります。」

「グッド！私の説明はいらないようですね！」

シオンは再度モニターを拡大し、特異点のより詳細な位置を示した。

「本当に位置を指定するなら、特異点はサンタ・バーバラを中心に発生しています。ところでダ・ヴィンチ、スキャンはどれくらい完了していますか？」

「大まかな年代と外観なら。多く見積もっても、今から数えて前後10年くらいの時代、典型的な現代のリゾートビーチって感じだね。なんだけど……」

ここで、解析を担当していたカルデアの技術顧問、轍の少女ダ・ヴィンチは少しだけ眉を寄せて、その可憐な顔を顰めた。

「特異点自体に魔術的な霧みたいなものがかかってて、内部の数値が安定していないんだ。例えば、実際にこのモニターで見ている景色が実際にそうだと限定しない_____といったようにね。……あ、でも、存在証明とかバイタルのモニターは問題なくできそうだから安心して！」

「というわけで、皆さんにはサラッとレイシフトしていただいて、この特異点内部の調査と解消に当たってほしい所存です！」

「毎度のことながらサラッとしてくれるな？！」

「ははは、でも毎度、という程度には慣れたでしょう？ゴールドルフ氏。」

ここまで静かだったカルデア経営顧問、シャーロック・ホームズが初めて口を開いた。ぐぬぬとまだ何か言いたげな顔をしていたゴールドルフは、しかしホームズの笑顔の前に何も言い返せないとばかりに大人しく引き下がった。

「そしてお待ちかね、トリスメギストスが算出した今回のレイシフト適合サーヴァントは……」

「へいよーなつでらっくす！マスター！」

「……………もしかして、カズオさん？」

「はい。横山カズオです！」

日本競馬界が誇る騎手一家、横山家が長男、横山カズオであった。

丸いサングラスを掛け、緑地に青の菱模様の前開きの半袖パーカーを羽織り、肩には大きなクーラーボックスを下げ、黒い海パンを履いて足元は同じく黒のサンダル。完全にこれからビーチに行く気満々の出で立ちである。

面食らったのはそこにいた面々である。「おかしい。彼はシャイではなかったか？」「少なくともこんな格好でヘラヘラ人前に出てくるようなサーヴァントではないはずだ。」「反転してない？」「でも夏だし……」全員の顔がそう言っているようだった。

「クラスはライダー改め、ランサーです！よろしくお願いします！」

「……キミ、トリスメギストスもいよいよ経年劣化か夏モードで調子がおかしいとかいう報告は？上がったりしない？」

「フォウ……フォーウ……」

ゴールドルフが眉を顰めながら小声でシオンに耳打ちをした。流石のフォウも今回はゴールドルフと意見が一致したようで、彼と同じくややドン引きしているようにも見える。

「カズオはネジ飛ぶと割とこれだ、気にすんなオッサン。」

「オッサ……？！」

カズオの後ろからヌツと現れた人影が、様子を訝しむゴールドルフと呆れ顔のフォウを制止した。人影の主_____赤銅色の髪に小麦色の肌を持つ、馬の耳と尻尾を生やした青年は、カズオとお揃いのパーカーと、白い海パンに金と白のスポーツサンダル、肩には巨大なパラソルを担いだ出で立ちである。

「君は……？」

「ああ、紹介します！僕の相棒の……」

「トーセンスーリヤ、自分の名前くらい言えるわ。」

「最近、カルデアに多く召喚されるようになった競走馬の方ですね。カズオさんがタイトルホルダーさんよりも前に継続騎乗していらっやったという……。」

「……随分詳しいな。」

「いえ！サーヴァントの皆さんの情報の把握は当然なのでっ。」

「でも今回は特別仕様なんだよね。何てったって……、」

「言わんでいい！」

「あ、そーう？」

「おほん！」

シオンの咳払いで一行は彼女に注目した。少々の無駄口は巻き(カット)で行くようだ。

「今回のレイシフト適合者はジョッキーの皆さんですが、カズオさんは、トリスメギストスIIが『最適』と判断したので、同行者として呼びました。」

ここまで言って、アトラス院の叡智はチラリと横目でカズオを見た。

「正直、彼もクラス変化でバカンスモード(こんなこと)になってるとは予想だに、いえ、分割思考(私のうち)の1人が言うくらいの可能性はありましたが……。」

「……………」

シオンの視線に対し、カズオはいつものなんとなく微妙な感じの笑顔を返す。

「まあでも、こうなったら出たトコ勝負ですね！慣れっこでしょう？そういうの！」

「完全否定もできんほど慣れっこになってしまっている自分が恨めしい……！」

にぱっ、と笑顔を見せるシオン。頭を抱えるゴールドルフ。ホームズはまたもはははと笑っていた。再び一行の注目を集めるようにダ・ヴィンチがひらひらと手を振る。

「現地には既に先行したサーヴァント達がいる。キミ達にはそのサーヴァント達と合流、連携しながら、特異点の調査及び解消に当たってほしい。」

ここまで言ってダ・ヴィンチは先ほどまでの真面目な顔をやめて愛らしく舌を出し、ウインクをした。

「……とはいえ、毎年恒例の夏のバカンスだ。楽しむところはしっかり、楽しんでおいで！」

「はい！！」

「あと、常に安全第一！いくらリゾート地だからと言って危険な真似はしないこと！いいな！」

「はい！！」

「それじゃあ、行ってらっしゃい！帰ってきた後の土産話を楽しみにしているよ！」

ダ・ヴィンチのいつもの見送りとゴールドルフのいつもの忠告を背に、一行はコフィンに乗り込み、無機質なアナウンスに身を任せた。

_____レイシフトの先に、溺れるような夢の世界が待ち受けているとも知らずに。

A.D.202X 泡沫栄耀離島 イスラ・デル=カナル

サマータイム・スターダム

=====

青い海と白い砂浜。海岸沿いに植わっているのはどこまでも続く椰子の木である。何の変哲も無いビーチ。何もおかしいところのないリゾート地だ。ただ一点を除いては。

「どうして到着地点に既にエネミーがいるんだよオイ？！」

一行の着地点には先客_____巨大化したヤドカリが大量発生していた。そしてこちらを視認した瞬間、やっぱり巨大なハサミを掲げて追ってきたのだ！

「うーん、この生き物達も夏の魔力に誘われたとか？」
「言ってる場合かアホ！」

呑気に考察などしているカズオと律儀にツッコミを入れるスーリヤ。一方で盾を構えるマシュと令呪の刻まれた手の甲を翳す藤丸は、完全に体勢を立て直していた。

「マシュ！ 戦闘準備だ！」
「チッ……邪魔くせえ、蹴散らす！ 箱開けろカズオ！」

「了解！ 前に出ます！」
「は〜い！」

〜BATTLE〜
(エネミー:怪鳥と不可視の敵意)

「_____来い！ スーリヤス……！」

瞬間、スーリヤはしまったというように口を塞いだが、頭上の光輪から生じた光を放つ赤い槍は、次々と敵性体に降り注いでいく。降り注ぐ槍は神罰のように敵を一掃し、辺りに塵一つ残すことなく光輪は収束した。

「……すごーい！！ こんなこともできるの?!」
「……その、今の攻撃に高濃度の神秘を感じたのですが、先ほどカズオさんの言った『特別仕様』と何か関係が？」
「……ね、スーリヤ。教えてあげてもいいんじゃない？」

無邪気に目をキラキラさせる藤丸と好奇心が抑えられない様子のマシュ、普段と変わらない薄ら笑いのカズオに促され、スーリヤは渋々と言った様子で口を開いた。

「……………手っ取り早く言うと、俺の中には『神』がいるんだよ。」
「やっぱりそうなんだ！」

特段驚いた様子のない藤丸に対して、面食らったのはスーリヤの方である。

「驚かねえのか？」
「カルデアには神霊サーヴァントもたくさんいるからねー。スーリヤも擬似サーヴァント……みたいな感じでいいのかな？」
「……………あー……いや、正確には名前繋がりで、スーリヤさんの権能のほんの一部だけを貸し出してもらってるだけなんだが。」
「うんうん。」
「……ほんの一部だけだぜ。」
「それでも本当に心強いよ！ ありがとうスーリヤ、教えてくれて。」

笑顔を向けるに流石のスーリヤも気まずそうに視線を外すのだった。

「(…………あーもう、もっといいところで正体現してカッコつけようと勿体ぶってた俺がバカみたいじゃねーか……!)」

=====

(タケシ&マリリン邂逅)

「いやっほ—————い!!!!」

「…………あそこでボードから宙返りして砂浜に着地したの、お前の弟だよな? ……あつ、ボード流された。」

「どう見てもタケシだね。」

「タケシさんだね。」

「おそらくタケシさんです……。」

「あれー、カズオたち!？」

流されたサーフボードを両手で抱えて海から上がってきたのは横山カズオの弟、横山タケシであつた。あのアクロバットで落ちない理由がわからないブランド物のサングラスと、ラッシュガードと海パンを身につけて、まあ、早いところ、兄と同じく浮かれポンチの様相である。

「マスターにマシュさんも! なーんだ来てたなら早く言ってくださいよー! ……そっちの子はもしかしてトーセンスーリヤ?」

「…………よくわかったな。」

「やっぱり! カズオ、トーセンさんのところはよく乗ってるしね、なんとなく。」

「俺達、ダ・ヴィンチちゃんから先行隊がいるって聞いてるんだけど……。タケシさんがそうなの?」

一瞬の不自然な沈黙。

「…………まあ、そんなところです!」

「なあ、こいつ怪しいからとっととしばいて聖杯吐かせようぜ。」(指をパキパキしながら)

「うわあー?!」

「穏便に! 穏便に行こうスーリヤ! どうどう!」

「……なんか、いつもに増してはしゃいでるよね、タケシさん。」

「そうですか?」

「うん。下手したらこれまでのバカンスモードのサーヴァントよりも_____、」

「……もう、騒がしくてなんのつもり?」

サクサクとサンゴ砂の音をさせながら、日傘を差した女性がやってきた。頭には大きな女優帽、目元には大振りのサングラスとその顔の多くが隠れているが、顔の下半分だけでもその造形はくっきりとして、彼女が類稀なる美貌を持つ事は明らかだ。大ぶりな日傘を差すその腕は細身ながら薄く筋肉を纏い、常日頃から自らを鍛える実直さすら感じさせる。何より、背後の尻尾が「彼女」が何者かを示していた。

「マリリン! ……ちょうどよかった、紹介します! パートナーのウインマリリンです。」

「……どうも。話が見えないのけど、この方達は?」

「この人達はカルデアの藤丸さんとマシュさん。多分会ったことあるだろうけど、こっちが兄のカズオと、トーセンスーリヤだよ。」

「そう、なら、よろしくお願いします。」
「よろしくねマリリン！ _____ ところで後ろ危ない！！」
「 _____ ？！」

カズオの警告に切磋に腕を伸ばして例の槍を出そうとするスーリヤは間に合わず、同時にマリリンが咄嗟に振り払った傘の折れる音がして、ようやく一行は自分の周りの事態に気づいた。

ヤドカリの山。
何故気づかなかったのかわからないくらいの数でワサワサと藤丸たちを取り囲もうとしている。

「マリリン怪我は？！」
「ないわ、.....お気に入りの日傘だったのに。.....私のバカンスを壊そうとするなんて、無粋な輩もいたものね。やるわよ、タケシ。」
「う、うん！」
「バカンスの邪魔をしたこと、海の底で後悔なさい。」

～BATTLE～
(エネミー：ヤドカリ)
(最初からNPMAX、宝具を撃てと言わんばかり)

「皆さん？大丈夫かしら。」
「はっ！いけない、少し頭がぼうっとして.....。」
「水分と塩分はしっかり摂りなさい。ここで熱中症患者を出すわけにはいかないから。.....ほらタケシ！しっかりなさい！貴方まで倒れたら困るのだけど！」

目の前でパンパンと手を叩かれたことでようやくタケシは我に帰ったようだ。

「はっ！ごめんごめん.....」
「炎天下での活動時間が長くなってきたので、一度現状把握のために落ち着いた場所での休息を推奨します。マスター。」
「そうだね.....と、どこか落ち着ける場所は.....。」
「はいはい、このためのパラソルとクーラーボックスです！」

スーリヤが差した巨大なパラソルの下、マシュの盾の中に格納してあった大判のレジャーシートを敷き、カズオのクーラーボックスから取り出した冷たい飲み物片手に、一行の現状把握は始まった。無限に出てくる飲み物に途中タケシが「どうなってるの？」とクーラーボックスの中身を覗き込もうとしたが、カズオは「企業秘密」などと言いながら、うまく視線をかわしていた。

「そういえば先ほど、タケシさんがおそらく先行隊だろうというお話を聞いたのですが、パートナー、 ということは、ウインマリリンさんもそうなのでしょうか？」
「ええ.....そうね。カルデアに召喚された後すぐに移動したから。」
「そっか、何かわかったことってあった？」
「.....この島なら一周回って見てみたけど、調査らしい調査はまだ.....全然.....。」
「ずっとサーフィンして遊んでたからだろ。」
「うぐ、そこを突かれると.....あ！ そういえば、あっちの船着場に親父がいたよ。俺らより前からいるっぽいし、何か知ってるかも！」
「なら一回行ってみよう！」
「ああ、私は遠慮させてもらえるかしら？ 傘が折れてしまったし、一回ホテルに戻るわ。」

「ホテル？……ああ、あのレイシフト地点から見えたあの大きい建物……。」
「そうか、寝床のこと何にも考えてなかった。そのホテル、泊まれそう？」
「別に、他にも何部屋か空いてるから泊まってもいいわよ。」
「……泊まってもいいとは？」
「ええ。貸切……というかあれ、私のホテル。ロケーションが良かったから買い取ったの。」
「ええ？！ 買い取ったの？ 特異点のホテル？」
「……？ ええ。」

「金銭感覚が違う……。」という一同の心の声が聞こえるようだった。高額納税者の兄弟も全く同じ顔をしていた。

「まあ、今は想像してるものとは違うかもしれないけれど。これから発展させる予定だから。やるからには一流のリゾートホテルに仕立てあげてみせるわ。」
「何か俺たちにもできることあったら、手伝わせてね！」

=====
(ノリさんスカイ邂逅)

「……………」
「ねえノリヒロ、ねえ。寝てんの？ 熱中症なるよ。」
「寝てねえよ。ただこうも待ちぼうけだと……ふあ……暇でさ……。」
「思いつき目瞑ってたくせに。……よく続けられるよね、ずっと暇にしっぱなしとか、僕耐えられる自信ないんだけど。」
「いや、意外と楽しいぞ？ お前もやるか？」
「遠慮しとく。っていうか、さっき寝こけてた奴が言うセリフじゃない気が……」
「お～い！ ノリヒロさ～ん！」

青年の言葉はノリヒロを呼ぶ背後からの元気な声でかき消された。

「……………ん、なんだ。マスター御一行か。」
「タケシから聞いて来たんだよ、何してたの？」
「釣りだ。」
「釣果は？」
「これからたくさん釣れる予定だよ。」
「今日はボウズで帰ることになりそうだけどね。」

大きなパラソルの下の折り畳み椅子からゆっくり立ち上がった帽子を被った青年に、一向の視線は吸い寄せられる。

「ノリヒロさん、そちらの方は？」
「お～失礼失礼忘れてた、相棒のセイウンスカイさ。」
「はいいどうも。『黄金世代』の二冠馬、セイウンスカイで～す。遅い紹介ありがと～。」

外した麦わら帽子の下から芦毛のウマ耳がピョコンと飛び出した。セイウンスカイと呼ばれた青年は薄く微笑んで自己紹介を始める。

「クラス・アサシン、釣りモードでやらせてもらってま～す。ま、俺は全然釣り参加してないんだけど。」

「さっきから言ってるけどお前もやればいいのに。」

「だからパース。来るかわからない獲物をずっと待ちぼうけなんて、僕には向いてないよ。……ふあ、……ねえ、昼寝していい？」

「熱中症にならないようにな。」

「さっき寝かけたお前に注意したの誰だと思ってんの。……ふああ……。」

セイウンスカイは持ち込んだであろうリュックサックを早速枕がわりにして、猫のように丸まっている。

「……あ、そういえば。タケシさんからノリヒロさんたちがずっと前からここにいるって聞いたんだけど、何かわかったこととかないですか？」

「そうだな……教えてもいいんだけど、おい、スカイ。」

「……何、寝ようとしたところなのに……。」

「レースするぜ。」

「ハア？！ふざけてんのお前？！」

セイウンスカイはそれを聞くなり勢いよく起き上がり、耳を絞ってノリヒロに詰め寄った。突拍子のない言動に驚いたのはマスターー行も同じである。

「ノリヒロさん？！」

「本気も本気だぞ？まあ、本格的なバカンスに入る前の準備運動と行こうぜ。」

～BATTLE～

(エネミー:ノリスカイ)

最初に スカイ「やる気出ね～」(永久宝具封印)

「スカイ～……」

「人が寝てるところ叩き起こしてよく言うよ……」

「でもわかったことは教えないとな。………何もわからないことがわかった。」

一同が脱力したのも当然である。

「お前のことだしそんなパターンかと思ったけどさあ……ああ疲れたし帰りたい……。」

「そうだノリヒロさん。もし良かったらなんだけど、ホテルに来ませんか？」

「いや、俺らは既に寝床があるんだ。遠慮しておくよ。」

「……ちなみにどこ？」

「秘密。」

カズオの質問には、ノリヒロはいつものニヤリとした笑いを見せ、「ほらほらとっとと行ってくれ、魚が逃げちまう。」と、マスターー行を追い払った。

残ったのは元の2人である。

「……せっかくいい寝床にありつけるところだったのに、勿体無い。どうして断っちゃうかなーこのオッサンは。」

「別にお前は行っても良かったんだぞ？」

「うるさいな。っていうか、釣りなんてそもそもなんの意味があるの？第一、この海には魚どころか_____、」

「それは言わない約束だぜ。」

「……………連日お前がここで何してるかよくわかんないけどさ。そろそろ僕に教えてくれたっていいんじゃない？」

「……………そうだな、確かに相棒にも秘密にしてるのはアンフェアだ。誰にも言うなよ？」

「はいはい。」

ノリヒロは周囲を見回し、誰もいないことを確認してからセイウンスカイの耳に口を近づけた。

「……………、」